

研究機関名：東北大学

受付番号： 2009-475
研究課題名 緑内障患者における検査データの総合的解析
研究期間 西暦 2010年 2月（倫理委員会承認後）～ 2015年 2月
対象材料 <input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/> その他（非侵襲的検査データ）
上記材料の採取期間 西暦 年 月～ 年 月
意義、目的 眼科疾患において、緑内障は失明原因の上位にあげられるが、現在、緑内障の治療は眼圧下降が唯一エビデンスの得られている治療法である。しかし、眼圧下降療法によって眼圧下降が十分に得られても視野障害の進行が停止しない、あるいは進行速度が変わらない症例が存在する。 そのため、緑内障には高眼圧だけが原因とは限らず、その他の因子が関わっていると考えられる。この原因解明のため、また、新たな治療法検討のため、緑内障における視野障害の進行の仕方・程度の把握と、その視神経乳頭の形状の比較を、Heidelberg retina tomography (HRT II)・眼底写真やハンフリー静的視野検査から得られた結果を用いて検討する。前房深度や隅角開大度、角膜厚と緑内障の進行との比較のため、前眼部形状解析装置であるPentacamの検討も行う。 また、緑内障における視野障害の程度と網膜神経線維層厚は相関すると言われており、その測定として用いられているOptical coherence tomography (OCT)を用いて、緑内障の病態把握を目的とする。加えて、緑内障の原因として、眼圧以外に局所的な循環障害の存在も示唆されており、非侵襲的に眼底血流速度の解析が可能なレーザースペックル眼底血流計(LSFG-NAVI)を用いて、緑内障の病態把握を目的とする。 これら非侵襲的な緑内障検査で他覚的に得られたデータをもとに総合的解析を加える。 なお、上記機器類による測定は、保険診療によって認められており、日常の緑内障診療で使用されているものである。
方法 緑内障患者を対象に、文書による同意取得後、上記の選択・除外基準を満たした患者に対し、視力・眼圧測定・ハンフリー静的視野検査・Pentacamを施行し、散瞳薬で散瞳約1時間後に、血圧、眼底写真撮影・HRT II・OCT・レーザースペックル眼底血流検査を行う。外来通院中の患者に対しては定期的にも上記を施行し、経過観察する。上記検査はすべて非侵襲的であり、日常の緑内障診療で使用されているものである。 有効性 緑内障患者から得られた検査データを解析し、進行の程度の評価を行う。 安全性 非侵襲的な検査であり、また、経過観察中、眼圧検査・細隙灯顕微鏡検査や眼底検査にて、医師が診察を行う
問い合わせ・苦情等の窓口 〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1 東北大学大学院医学系研究科感覚器病態学講座眼科・視覚科学分野医局 TEL 022-717-7294 FAX 022-717-7298